

献呈の辞

風にゆれる木漏れ日にも、うららかな春の光を感じる季節となりました。今年度、専修大学では新しい学士課程の教育が2年目に入り、神田キャンパスの新しい校地を活用した新学部 of 構想も具体化が進められてきました。期待と不安が相半ばする状況ではありますが、少しずつ将来への展望が開けつつあるなかで、今年も3月を迎え、退職される先生がたをお送りする季節がやってきました。

専修大学文学部では、2016年3月末日をもって、日本語学科の鈴木泰教授、日本文学文化学科の仲川恭司教授、人文・ジャーナリズム学科の樋口淳教授の3名の先生がたが定年により退職されます。

鈴木泰教授は、東京大学文学部国語国文学科を卒業された後、東京大学大学院人文科学研究科に進学して日本語学の研究を深められました。その後、山形大学・武蔵大学・お茶の水女子大学・東京大学・京都橋大学での勤務を経て2010年に専修大学文学部に着任され、6年間在職されました。

鈴木先生は日本語の文法、とりわけ古代日本語の時間表現について、数々の業績を重ねてこられました。『古代日本語時間表現の形態論的研究』（ひつじ書房、2009年）は、長年の研究をまとめられた大著です。先生は、それまで古代語の文法研究には用いられることのなかったテンス・アスペクトといった概念を導入し、伝統的な国語学とは異

なる仕方で動詞の語形をとらえ、時間表現の体系を提示されました。

先生が着任された2010年は、本学文学部に日本語学科が誕生した年でした。日本語学科は、研究・教育の両面で豊かな成果を挙げられてきた鈴木先生のお力を得て専攻から学科へという飛躍を遂げ、発展を続けています。

仲川恭司教授は、大東文化大学文学部日本文学科を卒業されました。在学中から書家の手島右卿（専修大学文学部創設時に教授に就任）に師事し、若くして類稀な才能を発揮され、独立書展や毎日書道展で数々の賞を受けられました。専修大学文学部には1982年に着任され、以来34年の長きにわたって研究・教育に尽力されるとともに、書家としての道をきわめ、国際的に活躍されています。昨年10月より本年1月までフランス国立ギメ東洋美術館（パリ）で開催されていた「墨の世界現代日本の書」展では、実行委員長を務められました。

所属学科の名称は国文学科から日本語日本文学科、日本文学文化学科と変わりましたが、先生はつねに、芸術家であるとともに研究者であり、かつ教育者であるという姿勢を大切にしてくられたようにお見受けいたします。学内の各所で先生の揮毫を目にしますと、ひととき心が洗われるように感じます。また、学科の会議などでは独特のユーモアで場をなごませてくださったことも、なつかしく思い出されます。

樋口淳教授は、東京教育大学文学部仏文学仏語学科を卒業され、東京教育大学大学院文学研究科仏文学仏語学専攻に進まれました。その後、ベルギー政府給費留学生としてルーヴァン大学文哲学部ロマン語文学科に入学され、卒業後は同大学大学院博士課程でさらに研鑽を続けられました。そして1975年、専修大学文学部人文学科に着任され、

以来41年の長きにわたり、研究・教育に尽力してられました。

樋口先生のご専門は比較民俗学で、フランス・日本・韓国などの民話や民俗を幅広く研究してられました。『妖怪・神・異郷—日本・韓国・フランスの民話と民俗』（悠書館、2015年）は、日本・韓国・フランスの民話や民間信仰が描き出す妖怪・幽霊・神・祖霊に着目し、それぞれの語りの構造と世界観を探究したユニークな著作です。日本の民話研究においては近年、音声記録をデジタル保存し、文字資料を付加してデータベース化する作業が進められてきました。先生は、それを韓国や中国のデータベースと統合し、東アジア民話データベースを作成するという壮大な計画を、中心となって推進しておられます。

今年、専修大学文学部は創立50周年を迎えます。これまで学部の発展に大きく寄与された3名の先生がたに対し、惜別の思いは尽きませんが、今後のますますのご健勝を願いつつ、深い感謝の気持ちを込めて献呈の辞とさせていただきます。

2016年3月

専修大学文学部長 廣 瀬 玲 子